貞享式海印録

埴字同字
字去留辭
テ二十八
体言 用言

五

へ 5
4676
5

べ5
4676
巻 5

昭和十六年一月十一日寄贈
尼野貴六氏

真享式海印錄五

曲齋述

□塡字同川就不通

考ニ玲瓏の打敷に涼おの庶子のときハ是を吳
竹の花ゟとハ入て仮字ハ仮名の祝を表し
古式より仮字を通ずるおあれと今ハ仮字ハ
考ゟ仮字ゟも本義ゟも通らぬおあり尤ゟ共
大祭をあく玄人仮名の共分ゟも及ぬ子ゟ
かゝ考　カつゝく広戸三テ号タリ　貞果ハ仮字
やゟ入　ヤアリ比ヤト入ル祀比　青文菊ハ仮字
さをとめ　柱お女ゟ　ゟハ仮字　ひハカ十連
たゝもゟ　棚機ゟ昔衣ゟ乙女ゟ　直林七夕ハ美川
いまゝおゝ考　否沼ゟ三神巳合玉フ宮　苗稻穂ハ仮
おのゝそ　莫告文ゟ　神酒藻ハ美
ゟのめ　篠芽ホト明白ムヒ丁ゟ　朱ゟハ美
ゟをり　ゟハ助字　枝ハ仮字ゟ

[illegible] 月八仮字七八月打成モ不苦
つんとちつまちり月立月冨く 朔晦日八美
氏和歌き奥仲おもも越不畑おあ一九
あくる伺を推てる通セよ

山夕 栗ル
我ものおを八る屋と流くて 東和
後京のちゑ我とおくちち 太宛
時 作 おり
福山の屋い近付ロ付り条 苔田
皮 弾屋をる面の傳教すく 文考
注 つきもあんりぐて秋き程住表 乙掛
ちゑおよ起て跡表の日も高れ れ枝
対 儀のむくうを紙届る 十丈
防 よの中乃跡を高高くり 牧壹
形 かき淺よ住む彩し 和七
白仙 云て来る今枝の客のよ条 素乃
月を拾る 雲のお合一外
、 彩を千代の姫や業のむ 昨ウ

キ午 中くむくくるも三献 伯兎
月ニ雨戸汲の風吹て 莫二
義 イ 北野の雨よ表つく辛さぶ 口カ
有 ぞくとろ男枝い余程るあて 佐ホ
神十 ちと牛とん中ちんやト 乙抄
中 柱をる五町五反乃田柱服 お哲
中人乃口孝ぐたうそ 柿光
星月 木陰の月を屋目ニ面の内 泉石
月 義のあちくの佑やうま 松田
接ぎの役目ニ面ふうそ空き 而后
金彩 口瓜ーき方く 結 納 山夕
口 閑れとちーの点いたくそきや 仙芝
林布を捨るむの山口 青原
コ八 手成豆の挑ニ浩る服時 許六
牛 弱秋ニ仲黄さワく風吹て
ひんちりたぬ色天の表代原

十月 時〳〵 扨も まゐたきた 夜友
千 徒りもぬくもる花の きたるを 夕
搭手屋を又手小屏風 仙翠

夕 独してもの白くなる 言風も 名那
鼠 笑のさをする 苔のう粘 栗欲
樹と出て初際やすのいもの時 義

□同字おなじ 枝不畑

古今三 屏風に必ずあれも扨もと夜者目をも
又云神分の枝とまろうとうあいをを言川の
笑おとして花まい生苔の字形をんの乃一
▲言川の方位佳世引結ようそうもイ件い鉞
を畑まあるまで白ようまを合るる及ぬ
るい大小木はの言葉分うき字とまる一
牧皆 丁も大ろまるる屋也く 文 原柴
大 眉作る窓似ようー 水浅 法子
秋 大系の俳屋アるる久ーき 義
れ 秋あれい花り言葉の太戦横 鉞士

タイ 後のあ〳〵さい後おすー り 要拾
大毒の及城勇を花乃ものき角
言白 大ようよさるを拾一手 仏 比波
、 お仏ゥ言ようさるある佳る屋 以之
お和〳〵ても大件のるの 左把
弧 弧の小号一脱要る来て る英
ハ 十りもりのようくいりる りま
弧 世のるるる小浴はて面白き 佐ま
弦 又森お宝れい曲のるる士 立ゼ
弦 拾〳〵のきあ〳〵 諸れ彩の月 嵐言
拾 言拾ものる言字のるる麻 ゼ
樹 おるるある木のるる風ちる佳 拓む
木 世屋の手を今忘ーる 林子
木 拾小木も仏と守い文 面 支考
皮 拾の木ュ通別るる角田川 斗義
ギ あるきぬ意ゥ母を整文 佐例
待木もそるるいる寺立医 来常

拾 行

鶏頭も田舎〜あれ後さ　仲秀
隣家の垣の正ろろ〜門　呆水
水打て在村面のくさめ　伯楓
私当の作を拳る篠〜山　呂林
月水の付言葉も足て色て　りね

梅十 水彩

手礼をお所の下人立て　玉英
ろ木〜家れ元も屋〜　義
おつけぬ口を力を太立男り　伊子
お惜〜寺らを正れ秋の風　おむ

枇白 山九方

辰

人の鳴て去の分乃上　文幼
乃〜に先拾人て出され茶を入む　すも

成 コ

金屏こお所の子仮を移〜　り
風　紙燭の寺ん寺屋　葵乃
早い生て出されと寺のちり〜　琴尤

音

七月こ人の寺る眼の葉　文弾
ちんて寺〜も正を尤角力　伊行

変地分

鶏頭　行云い天脱面の人を　五一

□英仲　三去

辰　成陸奥木実のぬきイ名い三尺に浮すく
長こ春乃保こ奥院のぬきイ仲い数を字幼
▲字こ乃イ仲こ号く又白去る去も式い面去あとあ
ぬてイ仲い悉三白の字去こ但三去の作白
又寄〜ぬおい巳上の作を拳お付ても同乃こ

拾 松

こ分れて寺るを残す松　素英
ものとも乃。松乃乃乃　数　ソラ
辰　松の張て涼きし悔の声　妙芝
、　松も乃て月数の香む　祐子

枇杷 、

衣肥松の人乃こ名れ　て　秋信
成おい松りときとて柚の白　フ由

焦 、

松草の素乃こ屋〜え梨　田东
こ乃の松葉を拾こ寺今　銀杏
寺乃〜柳〜こ乃く門舟　信吾

皇こ 柳

ぬきこ〜こ作こ潤市こ柳ぬイ

むぢ
ウ

書元するう山大の声　翁
滝沼う大殊寸橋書の丹　り水
他　の内て和ぞや書む　松志
名　書をすうを　泪乃　渭
、
山伏いぶの上和の手ふて　正秀
上　小多に和ふう神垣の上　昌房
自と又て侯紙仏　捻帛砂　キ角
表　巣彦て表の位のさひさ上　嵐雪
分
盤泪古き　弦の捻　口　宋湯
芭　八幡の町も和ある水　口　弓爻
口
脊中くの方る子を加西る　松りし
炭　脊戸（ほてふ山へ西く乃　俵水
セ
お仏も所る祇ほうん入　り和
長文　猫入てやつと仏と西瓜や　幸卒
仏
吉祥天女も色彩の月　翁
一ハ月
天　意之ゆうき天空のきぬ　住集
野百　ゆうりの声乃四や天月　支考
二

、
あやつりに言句を至てゝ天乳　庵尾
ムウ　時嵐の花の古ゆく大仏口　キ風
大　ゆうに人て声を至る大文字　素秋
□就不蝕留字　（ひらがな）きくしひふむ
分ゆうるすりケリ花に、ヨ（ひらがな）カスリテモ四シ
め就　蛛くしきさも・あり・ある・れ
ゑイトうれ　むトうむ　むトう　うむトうめ
多仏者
△りる三逆巳就
一ハ月　陸の乃月より八月より　翁
り逆
阿ちの　答ふ是合あり　素
形子和ゆうりとものひゆう　翁
他
極乗てよき居をれやり　泥仏
、
文ゆうきて字世へゆう　去来
乃ちあき畑の地の花さゆう　文卅
白き記仁形ふ村に翠を送る　翁
次句
原の火新鶏を　別る　角
ゆう陳殿い掬を別れる　方凡
ゆう

索

何風や〜笠声てやる　陵水
おぼろの出佐さ石に腰をる　枕夫
義ひてさちめう伊山に出る　枕後
おりるお爲に木に〜ぞの及ぶ　信化
近るるまに加の情を対ひ　小枝
佐原〜なかの情を対ひ　林石
拾陸て笑ふ〜〜ひ笠　白雲
ゆ〜と伊せに陸れて哀あり　神叔
白兒　月
行う旅人の　嵐雪
高の雪新人のてさかひう　キ角
田に搗く麻にぬれて美〜　水我
人数の扶音白こと明ようり　叔
古き矢見に加ち人伸る　林明
月又に頃博の色弥ゆ　母去

中人

に雪を撥出る林石に出る　示右
鶏鶏の口押明て押きり　一林
来る人み〜女晴とる　去
舟ま分由去の屋居に仕切り　林
ま〜〜指を拾てちる　嵐竹
ひつそり〜新年の月の弓匹　史邨
性の下乃先下りる　山店
八郎の月代初に白しむ　竹
乃屋ちの角力陸し　邨
林檎の色〜拾に附そ　店
すへつとるを引起りる　竹
きく〜すひふちつむ　め
ちきんひくに支考
去屋に入る入の陸拾に支考
日も照み〜〜叢ちつく　及止
程てみんる山路を吹拾を　及朱
林の中乃家に大きく　固友
乙由

小文

三秋ハ多シ

拾き　ヤへ　三日も　了り　帝　苻　砂き

花を拾る月の小くらき　相笠
ゆもしい何を必の岩の上　義
きく月のえぬ田のちくらき　東秀
蟹を留て三秋をるる人床一　又石
まさ庭をく入れをつく　、
時雨くるはおまをの黄ゆ　示右
二てもわをさくすれいてでも　涼ト
廿方い只　京の方を家　柏白
実ゆ心形くといをすとも　林角
金仏上戸のわをも笑ても　老身
白川ときくより白一　樓垣　、
秋のりへをとく搜セとも　ト
△帝ゆ苻ゆ苻れ・れ・むとむ
苻ゆ苻の声　いをすゆり　義
一苻て月ゆ盃ゆき川柳　号邪
臥庭ゆ庭根ゆ村ゆ秋ゆる　ソラ
月の中をく又やり揚ゆる　沙経

杜白　竹　亮花　れ　府　苻帝　ムム　ヤヒ　ウム

ゆくも赤田京岱を　り東
表のをうーき生ゆ　泥士
庭ゆて拾きくゆを昔れ　義
綱代の舟を市の食　珍香
舟の形ゆをまをを　斜晨
和衣をきくゆ匂ゆを言れ　笠
鶯原て強つむ舟を送ゆを　義
夕丁寸舟の原ゆ原ゆれ　笠
焼雲の庭を泳ゆく泳れ　乙乃
時くのゆを又喰ゆる　東白
ゆ士の原ゆ方て立ゆれ　小枝
悔下の田町やきゆを空むむ　月下
原ゆ原ゆ又西ゆ　岳雅
負ゆ首つゆくく泉哭む　相西
凡や拡乃郭東ゆを　改豆
孫ゆゆ医ゆの医ゆを往ゆ　彳人
柔いをんゆくく笑原ゆ高ゆ　林房

箙

弦

梅畑さくもいとこゝ似うるむ　佐木
門出切てまゆ笑もさびけり　り木
勢葉所何るもうるも初るめ　佐
△て留弦不畑　カ二十三　古八三三

次匂

梅の木う悔まくはい弁ゝ森て　箙
梅の匂ふ何と松笑ゝ咲うて　梅ル
葉の匂を何と松笑ゝ咲うて　ル
夜ゝ十ちゝ行の帳子抜ゝて　重五
各候留をいゝく〳〵　カ弓
文ゝの林うゝ〳〵も土拍て　李風
梅畑のちんさき家ゝ解て　箙

丸

名ゝと地下と立命る家　梅帷
樓仮の別ても中の次くて　ゝ
郭の美尾の中ゝ〳〵て　五芳
みゝの華山ゝの弓を矢ふ　ま弦
尾のゝ手仏い石炭ゝ寄て　良木
月星も抜ゝ月れゝまゝて　柳船

風考ゝ

白仏

捏い御ゝ〳〵ゝ〳〵ゝれぬ　一紫
上ゝ〳〵ゝ〳〵と去ゝ家ゝ　白柳
仮ゝの筏ゝ夫の袴ゝて　皮文
英て〳〵一草ゝの徒　虹桟

ミゝ

門先ゝ磨む松の孔内て　風文
て留い多用ゝ〳〵ゝ筏を併れ〳〵と光西ゝ仏ゝ
七不出ゝ〳〵い拾遺三方仏書　仏社集　花ゝ〳〵
俳表紙　お注多　初茄其外俳半一

拾

△ゝ留三去　カ二十三　七五五書△
長き板ゝ〳〵ゝ〳〵ゝまみの寄ゝ付ゝ　筏人
下ん保生ゝ〳〵ゝ白の松付ゝ　ぬ行

長ゝ

ち〳〵市の中ゝ〳〵月の光ゝ　琴風
山ち〳〵ゝ〳〵ゝ　七面

滝ゝ

苔の尾や人の行ゝ　方は
居ゝ〳〵ゝ〳〵ゝ行ゝ聲女ゝ〳〵ゝ　、

松盗

ゝ〳〵ゝ〳〵ゝ〳〵ゝ〳〵ゝ　彼も節ゝ　柳士
宮ゝ〳〵ゝ〳〵ゝ〳〵ゝ〳〵ゝ　只仲

△あり留 カエルル 七ツ及多者 八

弟木い苔ぬゝ生て茂るも 義
衣ゑて旅するゝ 形ゝ

義、 出笠美の 利い僅ゝ 佐ホ
裸て居つてうゝ出するも 昨方
申、 ゑりのうゝりの面白きゝ 原ト
白 ゑの競ゝ 麻をおゝゝ 許云
三旨 立ゝてゝ 注者ゝ ヤハ
左ホ〳〵ゝけい 連んゝ 杉同
発も店〳〵出ゝ 傳水
浅橋 重傳子ゝいろゝむゝのんゝ 雅之
ソコ 会者ゝそゝちの子ゝ連ゝ 白路
岩多 ◎陸奥原のゝ ゝを多ゝ部ゝ 嵐青
◎お素ゝやの杖ゝ 風さゝ 信化
ゝれい考ての ゝい太美ゝ 六ゝ
素の性も 久〜ふゝ、

△ゝり留・ゝる留・ゝう留 三去 カエルル

ヤヘ 月ゝるゝ頃憐の之殆ゝ 末右
舟ゝ分由古の原居ゝ仕切ゝ 一林
ゝ ゝも ゝも茨さきゝ 九桃
ゝ 白仏の 禍ゝ ゝ 右
夫ゝり 白きゝ素ゝ ゝ ヤ水
ゝ 原及て大はの原ゝ入ゝ 見カウ
素森 ゝ造の原の幸ゝの ゝ ソラ
ゝの臭宮の陵ゝ住セ ゝ 口通
ゝ 森ゝゝ香ゝ ゝ 角傳
ゝ 住ゝ ゝある 牧ゝ 一井
次句 ◎武士の双 ゝをあれゝ 扇水
ゝ ◎人ゝの猫の月 ゝをむゝ キ角
ゝ 他のゝ ゝの甲乃 ゝ 小枝
お農 伏ゝの月の 青めゝ 牧長
ゝ 三去の伝ゝ ゝ ゝ留ゝ留の荷を
推ゝるゝゝりゝゝりも ゝ三去ゝるゝ

△ちじ笛三去　カヨロ

初月や先西宮をちまむ　翁
おのづから隣の松を眺むむ　斜岸
東屋のみきる高を仰ぐむ　清風
木の白き桔梗や美女の隠むむ　言水
ゆゝ翠戎度蕎乃悔うむ　李英
式為ニ之食セよやと拵つむ　ソラ
ロ五りの袴う高ちむ　翁
廿戸柳あるの門戸や門ぬむ　、
門庭の杭木や新の作つむ　似夫
用為や桔梗の門て悔むむ　、
支仮の井や家ニ震むむ　翁
段々ニ金新山や天つむ　去陸
佛と吹田のちゝ作いるむ　夫
孝出すを又苦地名呂むむ　、
△ろし笛三去　カヨロ
ちゝ田も人ニうゝ　翁

拾白
一格
拾
古拾
カ山六ハ式外ナシ
拾

今の月ゝ戎度ちゝ　イ拾
地戎の苔乃問ゝさゝ　少我
平田の仄社ちゝ　キ角
月ゝ月ゝ高ニ高ゝ　園友
ちゝ月ゝ乃ニ高ゝ　水南
苦ニ保ゝ杖て出ゝ　一故
ちのおをちゝ作ゝ　紫友
ひすか為防の月ゝ　白ロ
月ゝ月ゝ高れ庫の歌ゝ　詮之
長白の保多ゝれと考ゝ

△ず笛ぬ笛三去　カヨロ　八
さゝびゝめゝ清草も拵ゝ　蓋寸
用んのゝゝ和ニ地ニ七寸　及朱
ゝる時苦いて寸孫ゝ寸　保ト
紀の保ミ　只ちゝれす　之仲
今ち重拵ち孫ゝ寸　支考
金ゝ高ゝんゝ高ゝ高ゝ　、

拾白
一格
拾
古拾
拾
拾

三笑

居ながらの日の出も立ち
傳子の光れねもれれす　桃妖
ますしの天竺の賢もたれも寺　暁雨
をておく金剛の雲たりやま寺　之乃
戸柳の陰いちをおさめ　廿端
住吉　笑のよるる住居さめ　青像

△とぞやうさーさうーあ　△とぞやうさーさうーあ

面白の拍子の秋乃枝すゝや　菊
拍子に成を切る　梅や　相楽
ちよつとそちらの松かろろ　南枝
冬夫時分ろろて咲るろ　紅之
月影も宵くゝ淋しの枝の長さ　洞竹
咲ちさる淵のあさうの狐さ　支考
葉ろ奥の角を堀ろ　唐風
仍ぬ井戸いけの松　一
子供のろすまおを志ろ　不竹
角へおちさ至て来ます　伯空

△快ろうーあ　面白ろ

一格

去

住

葉小枝ろ葉の千徳の子ろと　去来
面白つく汁の味のそろ〳〵と　野童
大傳ろ小傳ろ吹へ伯ろと　夕市
拍舟の郎〳〵柏ろろ〳〵　宇中
ひろろきろの也孫の一つそ　茂人
咲分の葉ろ未ろきき白毒そ　一
世中の人乃見ろ〳〵まあそ　山風
ひつろ代口ろ〳〵き止ろそ　乃九
松原の東近ろの面白や　義竹
んもとあきく医者の美さや　一

面白ろ

去

住

壬　尾上を開つ木奥れうのき　枕布
　　植てみるこの子の数のきさゝのき　柄数
△もゝ〳〵べ〳〵　面白去　カヨヒ
カ　次狂きれゝ赤桃もゝ　赤後
　　撥乃おもも　松杉もゝ　正位
リ　料ようなる引やむ陸もゝ　角右
　　拾うゝと又のやゝ方もゝ　高巴
　　乃あよ赤よ　ようるもゝ　芝面
杉塗　ま寿と宮ゝ上いやひもゝ　寿吹
　　市よ出ぬはこんゝもゝ　巴与
　　吸おゝんどする陸もゝ　枕危
我　嵩ちまゝ斎ゝぬ祖又も面　面美
　　陸よきゝのいもせさゝ　国水
ヤ　ぬ月や杉て医生と鳴ゝ　赤枕
　　△よ・を・ゝ・比面去
　　オもをあゝ　の陸たゝ至　キ角
栗　徒の弓九徒き世ゝ出よ

郭　赤のゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　面　夜　セ　よ　り　て
　　ゝ九ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　

一樽　去やくに頼恵あり　陸奥
ちくと振はやさきく　うふ

武義　桂古く文科九の京中に　千去
約　ふるくるく名尼あるに
十七　恵むより学ぶに又教ふに　高佐
栗の実を出す寺　縄尼に　孝

△佐・ふく・ちし・こそ・あるく面お去
袴別衣　おもくをつ　翁
古拾　尿むに出るき神孫つ　伝徳
タテ　長くる数を翁掛つ
あくやの石合に間をつ　嵐
面白う掛に月いてるあく　伝東
古文　殺生の源にたひをきかく　隠秋
あく　麦を売むにおかれぬ石あし　ソ重
ラレ　畏る体に侯さ寺くし　ヤ水
三笑　帥より御の苦季を紙てそ　京栗
コウ　変い袴も　去に　ここ　古ヤス

侯　千佰もあきれぬ日和くりう　昨古ウ
ふり　年の少年のわるくりう　梨之

△結句て面に面カ仏に二石句に三

古文　古式に下句の一面て面も千句も只一と伺の
れあるや仏の辞も面る面ぬ丸あれと
石界にあをいく人の面ぬるいもぬ寺く
▲結句の一面て面古式に一度一あれとも葉へ
に一度の百句に三伺ふて一度あく一二度
あく二世宝い葉ろにあきろく葉へて一度一
度一世のあれに伺序りて潤る一と又始り
二ウ伺さる　おいわ去トカ石句二トカ伺ちり又
去句のて面い就を伺すに伺れて結句とそ
制すくきや左に挙る伺の中伝来伝徳方九
仏夫去い天古潤り出てる翁に徳売ヤ人し
結句のて面二三もしてあるく失け人く
徳くすく徳風ふくく売カく

他紫 百匂 て

兄のきろ子メちろー志て 伝幸
実ニ乙去去る 是とて
弓犯の差のろ〜を打て 仇徳
相相の夕〜 陽子を抱て 仇去
武義
八声乃月ニ宮を拝て キ角
遥世のまろニ寒まる歌て 翁
次匂
、
そ〜は秋 京をねさあて 方九
子母のぞんを宮ニ祝て 角
一 元長
おい畠ニ岑宮ろろ〜して 夫
一て三
ニ
投引飾まきそ始〜て 翁
たそ什 犯の吉世冨ニ
ろ〜ろの天下 穏ろ〜て 去
一原广
ニ
あの芳もろく のろく ニ 翁
春老の月いいとよくきニ
一
美起ふ沈もいそやは世と 夫
言義三る 俳歩りニ
は伝ニよろる三匂去とろ角

郭
、
あの〜 枝乃 ロ石 振ニ 角
あるひとる 枝の仲も 郭ニ 仙化
大注 去日二左 改六ノ注 短匂のて留ニ留い一注一くは老 翁
のニ留二ふある 故ニ二左の 改出あり 郭の ろも
二左ある ろニ留あり 注留
去日のいそ字の字 法郭 郭のあい一注白匂 翁
る七ア陽人沈ニ弁〜ろ人 皆古机を 紙ニ
△体字留 カ仙ニ十六號
形原 根ニ ろ〜き め 板の 面 庭 相紫
拾 毎老
二石 連ろ 三の 房 れ 竹 偽 翁
ウ
たろきひく 陰ふ 小声の 男同士
カ仙 陰ニ 他の人 彩 紫
辞苗 六匂ニ
竹 悠の 尖き 月の 夕 鼠 偽
柔の実 ろき四く 牛の 嘸 翁
ま ふて 君 寒 あ 山の 関ろ 柔 紫
かちんの くろ ろき 病 老 偽
為ろき 字 ろ ま ま 紙の 房 翁

仮のたゝ〜の合あひ〜事　紫
ゝ〜と解くる所の孫ん　楊
否吉凶をうゝ〜吉下　翁
もちうてをきえ残の角楷　紫
乙名の派を意味肩衣　楊
生代の稱に於くる扶桑履　翁
毫の日あ〜ゝ毫る凶吉　紫

△てゝ多力仙十五號

曉の新面と引抜て　小枝
月紙一面あゝ〜と佐そ　八紫
明おいふくる時いさとそ　枝楊
みのきれむの吉ゝ〜〜　万子

※陸橋〜アれい自利の連り　紫
まお内ゝ　佐乎を表す　枝
発ゝ〜も志ん不ゝ取ゝ仰て　子
三世おゝもあもあ意する　楊
除名を乳のおもちくやち　枝

新イ取おゝ取記てあく　紫
多夫ゝの神ゝの立夫ゝく〜と　楊
子供ゝ年取ゝ取てゝ也く　子
松の木の二本あるゝ町の名　紫
死ゝゝも〜命てゝ毫ゝ　枝
ゝ伊の周と月を抜分ま　子

十四三下続る仮い影一は三仮を足て句稿
仮名面の時い才三字面ゝすは辯位を止ま

□打合辞

苦ゝゝ打合辞　ゝテ煙ゝい「月」三の面ト四ノの中
「五」ノの面ト六ノの中「七」ノの面ト八ノの中表の内
たゝゝ出ゝゝ絶ゝい打合ゝて月辞を煙ゝて稿の中
ゝゝ才ゝの面ゝ〜ゝ抜ゝ絶「ゝゝ」ゝく煙ゝて
年式の帳紙ゝ二行ゝゝて使る所ゝ月辞垂て足後
あゝと表ゝ行を除る古今通式ゝ祝已下ま
位「序」抽ゝゝ毫の一行ゝの時ゝ表ゝ件ゝゝ仮あく

絶さすして。
杖の日社教
月ともはなの
まうる次て。
△絶より出へい不麺仍
絶さまして杖の日の影　一泉
月ともり抑の来る次て　左化
花敬
△表ニお合を許る仍
お扱る尾ニ祐をあれて　キ角
教て
正宗ちやとてあて納る　嵐雪
壬ニ
仍客の清絶てる夕月　乃峯
指さん方ニ月ひつむく　村教
伐
木枕ニそそ〻ん頼の次ニ　岳雪
出押の後ニ武士を忘す　凡乙
しきの年武ゐめ乃ニ若ゐすと芝西
△祝已下お合ふ麺仍
押侍る河之の口を喰ゐて　羊

尾ニ尾を付て咍ニ筆　ヤハ
印て
匂来る木魚ま人角おて　羊
月ゐきてえて使ゐる月　教生
拾
若生ゐ仏の孫を枕して　いう
、
芳ニ出て芝ゐる　夕兼
、
引却ゐ相の枕も手えて　文芳
、
枕おきて寄ニあす出　支考
、
焼仮を別ても中の冷て　白雪
久
出尾して出めゐゐ　山芳
、
日の生やゐ宮仍出ゐ　舟泉
あ
ん あけニ出ゐ　し　キ河
ニ
包
、
乳色と曹河宗のそゐニ　枕り
集寺要ないゐ　影業
、
式枕ニ古き教い芸仍り　羊
奚
ゐりゐゐて　嵐雪
低
、茶小枕ま宿の十徒の十人ゐと　出来
と
舟ゐゐさと杖に来ゐり　芝

●回字付

秋日　懐を掻きして又出る　胡及
る　戸を閉める音の秋乃音　力兮
柔　あの赤いまう秋の日を踏みて　以之
、　る繁くさる　門の竹　垣　花ア
雲九　炬おの香を曉と点ちる　ソラ
、　凡るくる　羽衣の入　川水
拒　まさ止ぬ高の戸明て出る　若葉
る　さ一殊くる　世翁の幸　久集

□回字付白不極

蒼つさ苔白の色を足して付白する所にいるる
字も付白を嫌ふ但月花に限れい付
ちまき寺及余に回字をよく付るを捨とする
仍　一代は又とあるまんまんもんの　井炊
九　凡大名も色〳〵ある　栄友
、　垣いたれと実るおの花　卍阿
カリ　ちまきさ寺に尽れ言ふ　白尼
みの　三月の月みなく　埋れ他　笠月

カイ印五

ちう　も一搭よ高の頭みくも　真語
若　若しくも巨石る咒　口カ
巳　節とて書く後京の日〳〵　りホ
雲九　凡畑さう一言る月を入て　ソラ
夕　卍を向は来乃畑乃　川水
六の巻の尊語の都まも伝あれい実に異寺

□多用の辞続不限

加一の辺を用る草の戸　芳亭
さく日〳〵なかそくる花の張　りト
搭い中の中のもの　乃そ　仙化
野　残る言残る巻山まの張〳〵　朱弦
る　絶て搭を立る寄　拳白
絶　度ちう紙さうつる新　朋　千り
凡くる眉を陽すきぬく　翁
け一咲て喜る元の宿あれや　キ風
はれて言をものとも木の多用の詩に続凡寺
ちま拳る孫茂不極伝の中にもあり

△三尺伐丈不煩辞

△てゝをものとゝもる　八三丈ヶ下

巳上の字数六字上中下

丈三尺五伐力仙ニ一不百

句ニ字ゝゝゝて二三不れ

伊あり二丈就いきき意ニ同字も数不あり

腰ノて　腰のて腰のとゝいふるゝ七ニの低句ニ限て言句の中るゝ文名あり或い「ゝれいきけゞの

てきたを使ひ向ゝ押字もとゞむ　抱字もをゝノれ

れて分句をさゝきくされとお伐ニ分ゝ付ゝ五ゝ

ゝもゝ向拍子ゝ用す早ぬ情て不のぬとそ

も却て辞の按合いに声ニ倍後ゝ一きれ之約文

▲寄ニゝ「てニをゝとゞめぬ」れ皆数重も

分句も煩さゝゝゝてニひく支考仮の伊ゝて

も吸ゝ京ゝゝゝ聞ゝゝ情ゝの分の自使をゝ之

引ゝゝニ辞のゝゝゝを煩ふゝいゝゝ長ゝゝや

二つて笠すゝ為ゝれて　相撲

切ゝさゝ袖をもれ名不泥　叩鶴

伐刹て月ゝつ祝の庸伐　業云

まとゝゝの秋の風ゝ　自笑

撫ゝて寿ゝあゝ廉ニ年ゝき　如風

浮ゝゝくて蒔を通さす　双我

月ゝニすゝゝゝ家伐　嵐雪

国栗枯て拍山拾ゝ　神叔

三三倩引抜ゝ　我

ゝゝ守れて弁ゝ盗人　キ角

大ゝの川幅伐ゝ向風　叔

一木ゝ焚て仕ゝ拍方　雪

彫　上て

皃　中て　三伐ゝ

皮　上ニ　セコレ

四五枚ハ多シ

紙屋を拂くと呼る初厂　キ角
夕月は新むれ染て待とる　仏水
かるくも打すぎ君の振ぬを　阿
贈付まま分佛　大徒　常
何ゆへて為て為て出のさや　因友
敢て合点さセ　乙信水　彦
又中ふんをいく　壺笠　水
幸ん寄むむセ為る　茗布屋　阿

廿巳
中ま

該方の長間は院言の脊　史邦
弁当の菜を只おく石の上　末彦
流しき色は咲る　拾子　嵐業
巳月の子と人の君の九くれて　義
おく中　つき見ち　盛水
月見て面の陰やむ早的　邦
ほ中の儀はめく州屋　義

•戸を入るは同辞徒るあく
切麦をもやあけまおをて　伊紫

•てをを

松白
上を

幸子を西けい栗橋の実　義
松杉を挾おるちの門　ソラ
むりを中をを一ゆの坊　、
琴の徒花の思ひもつゝめ　口面
上るはあ西を字む谷川　友五
美き方の原居と実て目泉　苦翠
元のかくるを恨むしてのま　面
保えいあれと手居い只二老　伯老
ひあのそく徒とめめ　松宇
神明い夫れ一ゆの風　秋函
山伏を考めおの　左的
新宮いろも月秋の白ぬま　巳角
巣てきい松の小雨　山楽
拉帆私面は月出て　一花
京の鏡い扶ひ　キ角
誰ある芳のさひは存寄　楽
巳目中を毋の家合　大町

焦
中七

東山裏
上七

三尺の剣よりあをき彩色の方キ角
もや魚母を悔むはまた方角
我足の我美と笑やーすコ母
おれ園を捨ぬおうれソ色
白きの夜部風吉の十五情風
文藻硯の遊ぶさめーて義
蓮の道くるる英香は嵐雪
梅は桂の竹の子乃便支考
六十の笑をあやうく捨さらて正秀
文いきもの紅葉拾ー砂壹
忘れて月を見るみの拾は風吾
京の声の白を隔くるる独吟
ひくるさきそや杖を好むむ俳見
風一茎の別そあれ形有
ある拾と快の桃莫二
市のあん日い店先の拾そ有琴
さあ只今とふーーこ七品

根ず 自分 上の
ハマキ 上の花紙 今アリ
在花 八表 中の
紙白皆 のく
梅十 中と

お花稀どいい伽羅を油乃芋 拾ず稲出
舟をたくくと隣の左西く 拾失
西に地秋も極乗もある 昨古
宝声に月が欠める浪花拾 琴之
住む人もおい房さぬ 二
芳ーー釈仁を巻る子いあて 古笑
いせいの徒も乗る寺こ 橋乗
正月も四さりをつて出さ りる
孫よりくさむ声の懐 嵐枝
入れも俳に花の旦那ち 柳コ
莫よ杵のとことさ合 キ的
生代も嵐と寺の笑母 枝
大工のいひきすぐくう 和
陽稲も高さ和いもりもや寺 的
掏むーーに又起さるく秋の風 岱水
番に赤子を西すが小坊を 史邦
花ちの赤と又えるた性の下 寺房

●すふずぬむ

初き井蒲を上る美あり　義
去風よりも数少なる振芝右　嵐菜
周の秋庭る面揖の声　去来
祈りまうおろす月の新人　来枝
秋は実をるむらひの枝　乙彩
ヤヘ　中る
実入よき馬くの早田寿として　史邦
王きそうある馬　記　玄哉
押割て大よくれうあるる庭　示右
毒加は出る　傍乃首金　義

○八五ページ

〇すふ　ずぬむ　〇八五ページ
什の子あすを粒乃乃、　松白　中す
寄あるいそうまのくきむの山　涼柴
去風さすを谷の初布　独子　多り　下す
枝〻庭はおろす根の枝　西青
日は何り花市とと厂　山り之
月よりも玉をそう寺屋の恵　友由

未来　中ふ
臣さま寺杖はかれそき秀そも　嵐雪
むぐやと芽ふ花の初　キ角
二もん苗れも果さ寺本は出て　来
反打さ〻〻〻るめ一枝　凡兆
しゆ初い泥も又多寺育田さよ　義
切もそうめ仏塩つく　萩子　ヤ　下す
初花の塩は古什結度一　イ松
尾そう〻め月の新さ　文代
狐もつ〻ぬおときくし　仙雅
玉〻を我又おりて寄る山も　爰小
大徒もあれぬ他汁の付　不柳
集て又さられいちるあぬと　白紅
他は日庭い雪踏　板　拾　朱羽
若代はあれい貨も毛　理板
ゆるれは何やらいい配合　紅
振は拾くもれもあるる　羽　仍　中ぬ　ヤ　中す　ヤ夕　中む

海ろとすれいおおりとるく　牧童
白タラ 中ゼ
よの中の狂歌を書てむの奥　百青
積て歌人いはみ名く　支考
出て映れい梅の小ゝか　林角
三日 中れば
海の月も山より書て秋の月　考
こてあくれいとろ孔雀　芝船
見渡れい海おきき笠お　茅
風表子 上れい
奥の住者あく指居るく　才珍
花あれいむさき家る止れ　古芳
田面ゝむれし海の月を守　紅葉
拾 中ヒ
お乳帝て差うまおや云めるむ　如風
見物ゝゝ　ゝの玉之　自矢
ゆ辰 下ー
ゝの日ゝ陸ゝ張ゝ人お帆　童
新もぬ子角入てより　乙物
月の芋秋ましゝ名まれ　小枝
かゝう生ゆくいて匠函　宇中
ヤウ 中へ
ちてあるひんのむもたゝまえう　考

余程柳く乙名の来る　狂童
衣さを図てもる又の来る　口函
あくもくこの七夕るおお　芝
何ゆと寄うれ仏ゝる中屋敷
門外ゝ宝を拾てる天狗ち　国友
部 上る
死れさ人の状の名さもむ　乙由
暫子もひきまめる八九月　考
暫ゝ拾ゝる帆柱の　清風
十二年先の下を拾ゝて　仙尾
一格 中る
ゝ出されゝる吉原の卍　風
ゝ。取てゝ明てみゝち　東宝
白扇 中ても
ち食の人ゝ多ゝる月て　河信
人ゝ向てゝさけゝる月　眉青
軍も五年ゝ　茅
佐ゝ年ゝ　又狂
山架 上る
山家も町ゝてのゝあれいて　巴兮
其狂推て考ゝれいゆゝる多衣を軍ゝ

△戒垂 凡ハ三戒不飯辞

ゲン 教ノ 矣九 殺ニイカ イカ、ナソ とゝろ
や 判同 ル 倩ヨ 物 殺 辞イヤ ワ

仕拾ゲようて係も格お 甫乃
恵谷の傳イ白きけ畑 冬庫
俗ゲ来さやゝ戸ゲ明てゐる 素冠
むりもういれて君い後向 乃
文拾又ゲいる物てい中 涼ト
不化家の下次ゲ先悔れ寸 李に
柔冬ヨひく宮居の門言 関石
爰てゐる雲の古物ヨ拾ゲ明て 南畝
大久おりの数い京てん 加倍
衣代のまえヨ琴の出る 林舎
お仏ゲ言ヨさゝゐる住ヨ色 以之
名海とつふも大体の子 左把
聾舟ゲ矣てゐゐぬむの中 麦士
年も幸ん(男女)ゲ目も涙ゐる 呂杯

梅十 矣ゲ
家おを舟ヨ卑ヨむ言の月 拙戈
屋も頃ゲ母て京ゝ り石
ゐるて、ゐくい果い風よゐり 東麦
茅一ゐよヨ花の 一 附 茅
拾ゐる根原同の芸一さ 工山
拾 ヨ
夜交の徒ゐちゝま尺 琴之
三矣 言強ゐ足寺言田の琴の我 枇妖
言便ゐとて暴おゐ乃 茎二
仮すあんゐと授す猪柄 広三
笠 名月の他を宮ヨ胴捉て 石
化ーゐやぬ琴ヨ拾ぬ白花 連支
世(サハラ)術とて松乃下砂 庫冬
底 屋ゐの芭ゐ琴ゐ亜佐め キ角
垂 月あ作ゐ志のゐふ山 弁外
茶いそうき分の佳みき 茅
拾(イタテ イツ) 茶立ゐくまき角の郭仄 嵐言
いつゐるもあアの後十の斤強ヨ 角

去 イカニ ナニ

陸いくま車　世くま　カ弓

鶏頭て大使の陸入ケ　旦多

何やらきうむ我玉の声　秋人

凡像の姫や奥の田植哥　義

いちをおて糸投　芋　写形

水せきてひねの爰や雪むし　ソラ

庚まろやや申をまつや　宰花

伜 イや

夕臣 ㍑

出ケきの君いきの内より　四入

れむ使や　使中ろる　彼明

整め舟や悟乞仕の　宗和

日や 三洗 記

墨まろおの哀や八代哭丸　キ角

糸ま岩衣やれ臣居の臣　、

あ〜 ㍑

きは屋信ま赤あさ守惚れ　キ角

去の舟ろよ母のおき里　弓

ま〜やまき泊ま赤を釣て　昌碧

氣おや九十九瓦の丈一人　之乃 れ

アタコ ㍑

已ちちんをいまね汁ち

灯火や月も出ろ〜る男入

ことものれのこきや和ろと　陸指

和月ろ和侯の又の土角干　里川

席金や〜屋も居〜に　五夕

休〜も人や又ろむカお　角

陸ろ〜徒士いろく紅笠　彫業

桟豈西赤の浦あれ　白　肅山

待も只あれ赤の泳名　角

和の人又ゆ山地ま臣伝　業

ま〜〜の笛や布袋の夕涼　彦川

揺を氣赤ま六月の雲　支考

和花 日

秋赤のや和出を陸の舟ま入て　捨石

秋月ろ〜ろや指ま雲の色

ア〜を捲て言の月ケ

松む〜や書も行ろ〜ま

㍑ あ〜ろ〜ま拾ろ書も松む〜も

右白ま類のやあて天ま口合のやも〜ら

吉五

カイ印五

・でどよを

を通すこと〜家をして物侍〜〜う 文約

▲はやい藁の寸法敷く同体やも成煙ぬ有る
来も某も付くり はの之の失事子白命を歪
さむと お茂よる神きひ物侍て言を付くる自
賛をいつのこく拵合ゆぬ有る言を通と云
れと言有の何よ美を拵て人成せ有り
家い同体のやりよ お茂の煙いかれと志ろ云
てい平白ある有て降るやりをぬき類侍て
言を付くりはあれと支考の一癖 論方命
△上下はおそい茂不煙辞

三ツ
でどよでむちむ志くくきりうあり
るくあくやちくよりうち

炭で
寄舟てあくいと自慢きあに 佑木
俵くれて大きえて来る 子サ
又ちも仏の版て拵を はり牛
ちうちの連を表てあらく 麦士

寄、
一時くも家の板よ陸を守 風茅
会仏でけす市の松文 巴蕉
をはても弱れい涼しきあて 右範
三千子のさひよ 木 拵 六之
出家て寄ゆおれや奈硯因 白柱
山東といくとナをを尺陸て 栗几
出多、
只足師めをの式 柱
くるるちきい会いはれとも 東柏
と、
茂られと俣よかうて木拵れ 東素
小庵の度い物る度拵や 民扶
寄、
八彩よ拵ちと月いあ 乙由
あのりき尺よ寄の仮橋 支考
五六む田中の松のあちちち 井炊
三日よ
おれい彩よ化されさくよ 除風
時宜てあんそ何も否〜 林甫
度〜よ胸を下して降ちり 卍阿
ちらの東の歌つあくて 白庭
物を

もちるそよ夜てさえ否　之白
雲在と人在ちく〳〵陸奥ろり　鬼要
いう拾見い妻そめてさや　重
年の利発を町ま弘めむ　咲山
去秋　重直の因の幸ゝも分〳〵り　ソラ
む　月も今寄と又むるの市　義
拾　徒う伎〳〵む碑の銘の寄　雨相
ろう　美生を拾木のむま拙保て　ラ
去の拾う母衣ぐるむ　口通
あつ　初恵いゝ妻宮を化粧てむ　義
むし　夷の衣をめひく〳〵そめ〳〵　ラ
明く去めむ工を倭ま生て　不玉
みの　お皮の忍ゝ因と呂ふむ　立芳
、　木ゝあうりの寄の夕れ　風麦
　美衣を又ちむと人の降て　義
　凡房を張返さむと持弓　イ人
八夕　弱も向の明神乃寄　乃寄
むと

夕寄ま牛房ひくちむと跳れも　茎二
年風寄る流球表形〳〵　支考
却返てる小田の乃寄　呂丸
夷　汚ま〳〵るの脊ゑる本陸の舟　不撥
く　去陸の子の柩の思〳〵き　キ角
汚ま〳〵るの脊ゑる本陸の舟　キ角
あ〳〵　後ゑうりる金二方南　茂人
き　いとそ〳〵きを他人ゑ号〳〵う
帽子ま風も涼き中小性　り東
拾実　明く口返てを芳房の文　角
、　夷〳〵き声の旬を賀て乃る　凡峰
さひ〳〵き付く内て小神立　智矢
寄夷　あ明の凡出返て一柴ちる　呂什
、　いよの伎のひ〳〵と寄き　百花
　る り灯の月を〳〵色ちく　拾風
タコ　伎の拾そる多の夕れ　之室
く　廿京花拾く〳〵と跡義て　義
　一度あるる二度もあるこ　考

白タク

去いも杖い取とかれる　径吾
あうぬおまふとふくろり　小枝
柔おて れ考い れはあるうし　西重
立てあてある乃の大日　弱
ほ
ま　扨て乃田もくるく人の声　皆水
をむめ　をむめ　内もうりてそ　指重
書
書い仇合て貴の天しさ　大川
恭立の白乃時面行るし　子結
了
廿立せるくるよ　嘯
れちるに聞いま妻のまより　涼下
うるはまもこてわるし　竹在
廉
完一若庭ら一人来さ　嘯風
こそ拗て又ちうと云て小拗許　路小
否ゆ〜いおけ降さい言　玉推
紐
何よきくおやくまま伊佐母　千梅
れの嵐を中腰は　文　千那
月のれ郭月とやらて哀く

独拉を三ワ〜〜する　市中
さんふうと月の出る是乃庭　南風
まちまるくまの笑是　彩陶
秋〜秋す時乃ふくふ月の弓　乃友
又秋〜き杖の帽子　李吉
伐〜〜多の茄を折りて　天窓
上る大のあとうとうる乃を　地舟
ふんいもちやまくを　六之
陣〜〜時次ゴする舞のむ　苔二
ろる宮〜〜杖を見　和り鳥
ろんていそ寺寺の　髪　松川
あち〜〜使と文とり遠　り和
入おまふりと月の木ろう　白苞
萩の扉を乃れ　咒　遠　嵐雨
蚕和ゆくくもくりやめてをれ　卷母
搭衣留ゴ庭むをうち松ひ　西苞
のうちの浮す木瓜の山乃　ヤ水

胃を見て中る事疑うちうちを隠む害を明れい陰果ち　一故　弱
今の嵐り今　孔　井炊
如ま如ま あらとうち恨し　原ト

□仲云用云如伝

寄四日用条　凡無義の字教より害押後用の称き
河い仮令古武ま一二とくとも和を考て伝と
宮むく文和の河字い面をうくて八と宮むくく
七句とひ五句とひ三句の字去い左ま及れ寸
悔ておとうく面をさくく三句ま二句ま待すべきく

▲武陵一程五連の仮ま和去ようう面去五去
三去寸の程字を分おすくく孫ま三去のおも
面を陽くま二去ま詩セとそれて仲用の
字教ま和ある宮和れい多仮ま拭べきまく

△三去云用云佐ようう残不婚
拭ま出てあれや待ま少中る　支考

白タフ　キュウ　キ、　お木寸倭く洗るし屋と　屋苔
使いまくう中て下され　小枝
孫弓捨て去も旅を　整舟
寸ち言ろるれいひろうと　左大
ま丑く秋の失を寸やる　李子
麦の栄を連ま恒ち時を　麦、栄
目も高くるう着板の伊逸　巳笑
芳ある樫ま丑るをつき捨　容伸
乃仏の雪宮る筋ま川　り下
芽もちあく寸大別の枝　沙花
むま来て牛も恒を原寸ま　嵐雪
新かむ又ま出来ドひ和ま　カ弓
仮くもちあま戻る約柳　残人
思て和のをうくめて笑出寸　弓
歳ま丑出ケつ寸ま和　由戸
月文のかる彩地のわち庭　氾之
芳ようま出寸　桑　東鄭

カ　タテ　ひさ　芝伸　枕　青、

皇ラ サレ
たすけひュ加さ〜ケむ　世業
行く〜江戸の皇子を行人　巴分
目茶さんて奈呑友達　扶ゝ伝
月汐加て川う去くる〜　かり
雲のみる板に〜〜花生之　東雲
糸のきれるに中吹れや〜　蒲俳
小弓 キリ
みろ〜実ろ伝きすまひや　房梢
蒼生
笈 ヒキ
花さや〜新知人も見ゝよう　
雑の調度をそれ伝けう　一袋
赤ん坊中に市の見ろ　り寄
枕 立ヒ補
吹矢角捨てれ書の奉行所　達支
ゝ栗ほ〜そる〜夕ち　りれ
乃孫天皮ておりる裏さ寄　
冬 ヒ
わさあ〜のさも七十　羽
東加あ守ゝ寄ろ英令おあひ　ト公
□二去用云　至み
尺居 ヒ 板付孫有ゞ毎成出入

来至立ケ　お角合知器ヲ
伝吉 尺　下尺分て　ろ　ヒ　奈蓮　羽
尺号をよ〜尺ちさて　栃者　酒生
ひちりきを子けいむ尺の知ぬて　蒲乃
一度通て尺さきいう　戦　原ト
尺ナキ〜て伝度〜ろ一日和　竹拉
ろ〜ろ〜ろれいる愛い見ろり　、
ヒ栃
芝居尺生ゝ月の乳書生　矢旭
尺ゝ猫の孫子少年　葉先
、　栃ヒ井
居て。ある拾ふ書一月のみ　伯楓
舟のち人奈よれいおゝ〜　有楽
少多
、　尺ヒて〜ろ〜も乃空のち　栗ル
雪屋ュみるろ〜ゝ彼も高ゝ　云ゝ
元
奈ふいろ子猫もきぬく　東ね
、　絹状おて行て　をるろ子　ル
いやゝやとて〜ろくュ奈ゝれ　ト
彼ら来ゝやゝ〜戸ら明てきる　末府
ヒ

加くるやう柔法に何をてをるそ　答
狀況を後河の表紙更えて　佔ホ
仔細を考へ　梅花の　西
麦を先刈てとる　りま
待偽てみて　れ付ぬ小高
林大きして栄えて　庭のむ　去芳
日あ〳〵　れあ　苔藤
ま〳〵あんるのんをえる　乃孝
お髪ら〳〵　秋いすーん　乙甫
ゑる。西瓜を分て　ゆく　葛森
一幅　吹分てゐいめけるる　未申
分　振万つけてむ　山の不化寥　山只
昔　ゆてあく去用を　桜の煮付て　杜吾
七きゝ　庚をゑむ　叶ゑ元りて　之仲
、　変落の花の　さ〳〵つけて　貝ゆ
御　ゑ花もつけ　ぬ桜の実を　口西
する　きめまき　ゑ〳〵　化粧する
、

、　むり　時〳〵の　ゑひする　赤　方九
行する　あの中を　押れ出　、
ゑの布袋の　ゑ衣の　化粧する　寇考
かろ〳〵する　足袋をゑ　史邦
、　する　袋の　高るゑ　すれ口ゑ　極文
袋を　去付てある　答の　枯る　古日　ヤハ
有　あのむのちあ　ゑ　ゑあ　ゑ　ゑ
去　二枚ある　歯の　手　枕　桃子
、　摩をゑる　ゑ　袋の　宝ある　きゝ　ちゆ
ち　ちあるひ　人の　花も　ゑ　支考
ヤウ　、　寝ゑ　ゑ　ゑ　ゑ　ゑ　キ邑
、　下板に　ゑる　ゑ　脇を　ゑ　寇枝
枕　ひゑ　人ゑ　ゑ　れ　ゑ　ゑ　枕教
カリ　ゑ　ゑ　ゑ　ゑ　ゑ　ゑ　ゑ　ゑ
山カタ　ゑ　ゑ　ゑ　ゑ　ゑ　ゑ　ゑ　ゑ
、　ゑ　ゑ　ゑ　ゑ　ゑ　ゑ　ゑ　ゑ
小又　毋　ゑ　ゑ　ゑ　ゑ　ゑ　ゑ　ゑ
毋　ゑ　ゑ　ゑ　ゑ　ゑ　ゑ　ゑ　ゑ

雜

成

ある男の三度ひろ我ゝ成て キ角

子に杖ゝある者の 小伎 、

船仗ゝまゝ人等宮ゝまゝある 五狂

ムウ

、

へきて来るゝまゝ成ゝある

、

夢

一歩男ゝして みゝぬあり 雪

、

名月の宴い科ゝまゝぬゝ 伯楓

生ふゝまゝ出れい花候て りま

ヒナ

出

夕干ゝ出て もむ結廷日 義

隈の次出のゝき南 山店

文

、

雪ゝ出て出忘美を遊ちし 義

ゝ

ある人い故出代てもく 枝三

、

又一人毒の移ゝ出来るゝ かゝ友

雜

入

廉称 楽てむ恢乃入り 角

何代の出入あをひきする 尺岬

麦

、

小傷い紀ゝ、ゝ夢やふ入 蓋二

ゝめ人のむをゝさうおゝう 已説

墓地を喫て来る一季居 佳六

雜

味

おゝゝゝ毒のあの秋い宿ゝ来て 知角

毒ゝ

宴ゝ

宴ゝ出する乃兵そゝ宴ゝ 去吳

宴て已ゝいせの代 被 、

夢

くもゝと宴て宴ゝ一夜日 二

、

ゝ乃の時毒宿も又て宴て りゝ

士

ゝ祭いおけと奏る古ゝ 反東

、

月お宴ゝ祭て宴る出 恍

匂

門口ゝ化粧ちてる宿の去 る角

ゝ

引仮のさん用ちる男乃 り由

条梅

ちん出の出ぬ先ゝゝ 許古

多年

乃ゝより陸ゝ孫ち跳て 白王

宴ゝ

乃ゝ忘のせこを立れす居れす 宴之

夏仙

、

ゝ湖の傷乃連ちてもく 、

乃ゝ乃ゝ折忘ゝ宴ゝ 義

義

ゝ

仮すむ女 砧 ゝ キ角

ゝ

孫ふるゝゝれ竹宴ゝ 嵐雪

夏帝

、

宴ゝ毒も宴ゝ宴ゝの 敲 ゝ 立吟

ムウ 南 先指の南ム考く状使 不識
さちく生く突南と毎 不項
六行 合と 芙蓉の芙の芙合て 壷天
芙蓉合て庫程に凝き夕被容 壷平
笠 反也あ〳〵あやつの果 孫
三笑 ぢ〳〵まゐ〳〵まい皆考ぬし 枇杷
自仙 猫まさまるう考ま要うて 梨之
、 亥糸あれい今の 仕合 天竺
、 み〳〵彼の名のよさ又活をひく 宇桂
ヨシ 会仏うよ〳〵てちく年 乙 万紘
汐 丹波てもよ〳〵位るてもよ 涼ト
、 ふきの孫と お腰をれ 乙由
ケ ふ仮と行まをる 孫 柱 柳河
笠 旅 考や 弩ま考る 左考 柳 栄友
貧由

、 何房い古〳〵を考て出 喰 唐支
射 門外の柳と考ちく考ちく 乙羽
カリ ちく〳〵と考ま夕りめてく 周以
ワノモ 小仮の崑谷茂さ〳〵 山源
、 不拍子ま風〳〵舟の考〳〵 考白
△五去西去の用云活〳〵二去
二去の活又弟ぬおい三去とあれと同ま之
巳 ひさこのれを分活〳〵 菊
ヒダシ あ〳〵と矣門の同矣の歩反 、
夕ケ 宮ほて汐千ぬ〳〵のいう終 、
ヨルベ 打角 逐ま嗅る 早月 扶 嵐之
祝白 ぬ考〳〵冥れい九もかく 菊
ハクスル 乃祝の社月を又活ま 浊子
麻の考ま〳〵〳〵と打れ 出弦
出中 術の活り季を打をく 乙由
モダレ 彩衣木のきて考方芝活之 尤白
浪 ともまと考る四被の宿 楚淮
ヨリ

五月
拔菜を見る際の根をそれて
拔むを手をまる矢筈の弟　至五
三月の余を泊ておやせり　正平
三日　菜くりーをちちと栄の凡れ　支考
、　我振い狐をるるのもるまて　除風
我　考
代　菜おの子ーをき　蜜　柳面
自己　目を立ぬつまり者を引くて　キ角
出代　出代るて杖をせるーき　張杏
白粉　田中のたの通られ也く　依く
白粉　寄の糸汚を通す接の寄　風泉
皮　欠房猫を猫のよを出す　平寂
皮　肩を房ーて睡まるさ　素常
十五歳　むーーい古き恋のあれ狩り　紫菜
十五歳　かさむ多る子い哀を拾ー　口函
低　すーきの門を立す杖のれ　牧竜
低　泡るる兵兵のつちメ丹　北枝
□二五代云

拾　拾　拾　

コハ　小去の天部采だ〳〵たた　列字
小　小激のむ氏彩〳〵薩字戎　、
ムツ　先抜の南ム高〳〵快使　不識
先　ちち〳〵先く付帝〳〵舟　不項
天河　ムをとふちち〳〵ムらあ〳〵く　友油
中　ム風ろも去の名抜を情帝　キ布
友　去ちきく〳〵ちんゆ〳〵むのさ〳〵　主平
、　おろ寺のうちも抜ぬおヤ　り和
キソ　抜色として内性の多ろる　り合
内　お仏の内い　蚕すし　抜凡
山夕　お〳〵い伯又をつるそ油抜　白紅
お　抜倍のよめぬお〳〵陳く　太範
表　抜加の去ろも矢て山花　キ角
実刑彦　是ろる集ろ矢止子乃　抜高
署　古号附〳〵抜房る開　囚実
古、　なて陳のちくさ〳〵ろ〳〵古字　可亜

□三去用云

連ろ辺庚行行賛　賛附　弦字〳〵云
言嗜喰吹咳荻俵　俵粗　識習抜
二去に去の俵を挙ろるもの〳〵ろ
抜出　ろ性をあろる小俵の　連　支彦
ツレ　以ちよ去のあ〳〵連を　ム子
文型　残星〳〵連て含むろふ　皮文
、　むろ抜ちても連の手ム寺　抜隆
フリ　白高に小俵のちムの走ろ　涼ト
ヒ　俵高の新の列をてゐる　但行
三匹　さあ新紙ろてゐ〳〵ろ至ろ　形
、　和に水ろあれ歩ま　水甫
翁　陽生ろあ〳〵かんけちろむ　て抜
辺　ちろ〳〵一段に橋と刈てむ　屋甫
笠　面に入てむちんしくの早　文白
、　風ろ生く抜く抜ちりてむ　伯太
ひき　氏村の陳きく医去のふろ　力今
陳　郷ゆる抜の夕へそだく陳き　、

戊日 行 白石 吾由 爲月 右素 史邦 徒文 之九 イ指 兼陸 東警 陳竹 函新 唯方 伯象 笠舟 方大 宋狩

月もまさて言ふこいまぞつれさ
世を門ふまの女房い持もとる
書紀 行夫の汚泥や岩も生村
、 藤まもや〜教文彩の森竹や
サルヒ 打角ものけいおちるすく
行 狩猟屋て笑やちむ
位吉 振高う梅さけてやく
、 此のまろあを雑うイやく
小ち 糸の加るれ中宮れやく
、 今さて目々〜〜やく
白石 すん〜〜発ちやく
、 紙筆をててあてやく
キ午 元泥の打ちもあす芸振奏
、 り言いもくるむをそて
ヨ 振ものきり〜〜さむ言狩
戊辰 泥田に伊舟の扶う出狩
苣州のそるかるめ意をて

夜の明来る水のかちりめ
、 ちろまふふて又ん言狩 白石
、 まえのんちれの出狩 林角
丈 きえのんをうくて見れ 栄友
水さまやうる索 麹 嘉石
、 肩衣を言ふ言る松の枝 キ月
新 月をも仍あを井戸之の梢 陵園
白タウキ 小さん笠をきる程ふ 西 山り
カ 扶言あ多新ている 支考
三月 紙衣言て色を濃くも武田原 北而
、 小袖言ぬそうる猫の育れ 宰相
寒白キリ 呼をきく元い夕〜〜 巴猷
季中あれるをこあく 惟氏
保稿と寒中くれも寺 考
三日キヨエ 松い年ち中くで口をき 井欠
大たひ言ふ屋あ意をて 殘
サル 宴詩い見て仮も仮方の甫 張雅
ル

東云　山沢
広　妻え
梅お　東仙
、　仲太
白々ラ　小枝
、　枕川
ムウ　盛
言　朱角
れも　夕布
ヤワ　、
、　開色
三出　三鉄
、
帝園　あ信
帝　義
旋　キ角
、　嵐青
白前　夕兆

ゝそこの〳〵家い処の庁広
ワの枕庭めて尾広左
ぢのゐ中広くいぢくいぢくのゐ
広セて広めよゝゝゝ

ヤヘ
咲

馬場の人形を豚の仮屋
月満るゝ大きを次け
あのとゝ萩い咲と咲乱
咲初る花ゝ久殊の桂の葉
梅山
、
萩るゝ〳〵萩の外ゝ
ひんゝ庭のむの咲ゝり
芦川
、
白雪ゝ赤んむさくみの月数
秋の原ゝ咲ゝ水仙
七月
ちるゝゝつれあんゝ風と来ゝ
むい雪ゝちゝ住ゝ
れ
庭
ちゝむ赤人の手ゝ
月の下ゝ面い庭来ぬ捨舎
お
、
たゝゝもの今ゝ
六月ゝ一日ゝれ
天河
、
発生の梅い花の雪ゝ
ゝんゝも芝屋の
カヒマ
香のゝゝあの雨子や

林院
、
去来
支考
枝郭
十丈
考
牧童
和角
之角
キ角
来示
子祐
子サシ
秋芝
吉田
依し

牧
白見
ミ
牧
ヤ
菅
ヤ
庭
花
業
サシ
□三去
ともど
新
祝
ある
ども
カイ印
牧
栄
ゝ
牧
ゝ
三日
ども

牧ゝ古てゝの赤ゝ笠ゝ
栄牧ゝうゝも老の藤牧
牧牧の仲ゝ持人の月
院おり玉ゝ行の中仏
牧おりの枝ぬゝ寺我実
庭ゝゝ牧仲ゝの手ゝ子
母の手を枝て強ゝも強ゝ
夕のゝ〳〵る月の巳斎
云賢ゝ〳〵生寺院尼の合旨
云 カヒ五去
ゝそゝゝゝ

拍　子子まとて牧人の子を事する　尚白
とそ　むさとそまとまき旅だ兵　イ拍
山下　大殿にみやこ　ソ由
、　る歌の博とそ　
伏　山張の月をまろとて月も　
、　角の意とて　接柄み文　
みむ　るの乃ゝるる日い長白ゆゆやう　
やう　やゝとふんのあとの次やう　
拍十　所次の戸にておゝゝ子さゝみ　
さゝみ　欲さゝみ声ちやとむをおてやゝ　
山夕　おまさに又傳さゝみ乃きゝし　
、　ひんるる新孫やの店の傳さゝみ　
八夕　みけで使乃戻ゝまゝる　
ね　るるみる光のそとあゝて　
名文　献立る侯の役を行ゝて　
、　義入の所も計ゝ戻ゝる　
フリ　むりまゝいまれて君ゝ陰向　
　　さ乃

勾　翁こと内ゝまゝゝゝ乳ゝつまる　源ト
、　甘子まゝゝゝゝゝお乃　みゝる　許云
ゝひ人の英まゝゝゝゝゝだまゝて　ヤハ
英　詩まゝゝゝゝゝ作るみ　作古
、　ゝ乃るゝゝ十粒まゝゝゝゝ　二
きゝ氏　附木英ゝ　
ゝを　ゝ乃ゝ　ゝめゝ夕ゝ　ゝゝ木
八年　名月のゝひゝきゝゝゝ　ゝるゝ戸の舟　
、　ゝまゝゝゝ　
乃名　菜をゝゝゝゝ菜の汁　天竺
、　ゝのゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ　味泡
拍十　尾ゝゝ笑の水の流ゝて　仲志
、　代ゝ注義ゝゝゝゝゝゝゝ　七面
郷　ゝ戸の恵ゝ長ゝ　
ゝ　あゝゝゝゝゝゝゝゝゝ　
ゝ　秋戸の枝も今ゝ川向　七り
ゝ衣　肩衣ゝ再ゝゝゝゝゝゝ　支考

ヤヘ　我思
ヌヌ　ロくセヨヌヌそうくゝ言砂
夕　ちとまふもて又くん若彩　白屋
朱　陰くよまきくもむもむゝ　柳江
シ、　ちもきく余さの宇宙さ　只仙
、　あいまむるもみすきの月　柳士
　　月もまとくいそれあ者の内　イ彩
　　陵を生てもきまは面　
　　何そんてる寿んに月　臣吉
白夕　生活の快よ何と栗稗　小枝
何　何やゝもん弟を治四く　
　　ゝゝ何の指ち左ゝて　士
　　左ゝ何と以ゝゝひよ莲　宋麻
　　上ゝのお持に何と田の我　素翁
　　振ゝきるお振て何きるそ　泪月
　　何やうの扶よ小朝二三匹　冬翼
　　又夜拔ゝ多の耳　二　琴風

ソノ　夜血ゝゝ一節の芝　キ角
名都　晩のゝそろと移せ夜菜　彩
　　移ゝてくゝす夜ち　芙蓉
　　是移ゝきれ脇も空ちゝゝ　因民
三日　使ゝ行ゝ歩ゝてやそさそ　涼ト
コレ　植後ゝる田の中の小田　冬山
表扶　打れてゝるゝ中の戸の四戸　ソラ
中　投ゝの中ちろと寄され移て　三惟
植方　寄て移ゝゝ藪の中　
　　町中ゝいん社の移　秋房
茅州　咲移ゝむの中ゝれ中　八栄
　　中歩口家の　移合　夕秋
ムウ　我移ゝ中ゝき後る月の多　東彩
ノ　北ゝ移て笑ゝ大工の千寿ゝ分　東羽
山多　大ゝ　一日の扶
大ゝ　大後い茅後ゝも酒巴　巴兮
山ト　大きゝ多雪のひゝりゝと　呂仙
本ホ

もり形い言ふ物の色水の色
すきおも色々の任出ある事を
雑書巫の祭未六一月の時 敬ふ 龍 影業
寅客ニ親い除一むの時 、
時 大打を伝く行ひを付 石間
皮 、 時ニ時今之くくとくるるむ 、
属 東漢の時より燕子之あす 東也
、 うき付く寄ニ麻ひ枝ニ枝女 甚二
炭 毒ふよ彼もわすあ毒の月 義
不 蛙をよ仏ふ〳〵そいるし コ及
八夕 いろとも徳い去廃ちく素 示弓
、 素ふい種〳〵ふを所の言 之川
拍十 拍乃を引て状のり不 有渠
、 百角声ふ日の出不 北川
白戸 拍ち素ニ出る伝侯の秋方 書如
方 拍きる方を笑る弟速 、
アメ 言所の数う要のまく方 老匠

、 乎紙衣ふい大方深て 朽夕
次白 被て拍の言徳の悪言 方九
言 毒の斧丁てうて言文ニ 拍水
乎 言もみき笑ニ月の為こと 拍室
、 宝とて拍のひの為る言 卜ふ
三日 数面の言もれさのかやき 支考
、 呼揺ニ言い少ふそれち寺 、
拍弁 万日の以ニ和て征の声 去来
声 象とはていいさう小紙の声 義
冬 、 ふて〳〵徒の声 カ分
、 声ニき会仏義を陳る 和数
拍 声もあく数の麻乃小茶ちむ 久我
、 ふニあ〳〵ニ斗除る声 ソラ
印 晩達ニ鳥の声も帰来り 小枝
、 言うる木より帰生寺悔の声 ウ
数徳ち小ふ声のかれめあき
声言帰トかうて成不拍

雑さ[illegible]れと尼くとつて　栗ル
[illegible]の[illegible]屋もりく[illegible]い第目　白粕
七さミ　恨を神も[illegible]れ存のすろ　涼ト
子供達むら[illegible]くくくく

天冏 雪降ばむれの 根上り 若呂
岩根なども忍れ冏恐の上り物 百川
きのあるもの降さう然上り 産支
燭台も接ら上れの引ノ上て 唐仙
冏上り月とむとの形ぢる 宏芝
、 形春を杜丹の情ぢ 乾上り イ吹
、 面白をある南る上下し キ角
ムウ 雪を梅をある武士あり 必我
ヱ 白雪を口付てあるの山角 自笑
金固 杖や芳三ヲ分る客とる 糸竹
分 臣分のむ陽氏の面出う 杜呂
了 除分て裾ヲ杜丹のむう候 、
、 降くる俵をきうず命ん 八乗
ヨ ん分て五ん時る者の月 子サン
信 れんの甘ちうて竹を明 弱
ヱ 雪ヲ陽の茅ぢる明仏ケ イ拾
陽 陽番のあ白を明る陽付 酒主

、 去先の田の荒付る陳明て 、
むを拾 月尺ヲと引紀されて明き ソラ
引 ヲ引のヲ万ヲる 拾義 四人
水仙 閑ヲて引出ず衣の香ヲ別て 香冏
、 板要引放し 寸子大立 、
流む ようあるヲ引我てゆく 老荒
、 ヲを通てう内多引巳 寺茶
ヨウ 要さ を店合の梅ヲ引抜て 板丈
、 水ヲのあるヲ冏ひく川のヲ 巴丈
杜白 旋て又わる成ちーの上 弱
接 降ヲるれ連を寸て接合 我人
ヤウ 接ひ接れるヲ仕表紙や 白
、 ひ接れるヲ仕表紙や 右書
杜 ぬヲのひさヲ猫るわヲる 文呂
、 第呂の万れ高る立れ母 里明
山夕 高ヲ立れのヲを立ヲ 東杜
、 明のヲん接ヲわれて立ハヲで 地敏

芸 独立し　はなの板を　去来
寺 痩骨こまく記事力あり　史邦
俳 に書く所れ名なの奉度を　宗祇
出 大文字に焼を書る古俳　近仙
の 夕月を高く重く杖の風　三吉
、 よりも出さくみつぬ老の分　京水
ふり いつあるか人の家をきあ人母　涼卜
スキ 蝶ふおも写る母とみる　但り
ふ 、 ふ〜人い山をあとお母　り和
庵 山住宅ふも只子供母　、
六行 考の月集て持る芋の屑　仙呂
ヌ 集てたるき　郭乃冥お　、
あ 家あくて脇紙と色むす浅　秋人
色 あの中い俳候色む　そ　義
茅州 俗去土てきてたひ絵む　支考
治 わ〜〜と笑〜と笑絵と西く　牧童
小弓 か笑うの仮陽絵む本十乃　如儀

、 俗情　面やうあきつるむ　赤穂
次句 夜金る持る拾る拾ふきして　義
持 雨お甘い夜ふ持れて　方角
色 持れてくるうをつの数色　和笠
、 花の位楊の如ひを持ふり　義
文伴 持ふんふあ〜〜く仏と　笠凸
、 蛍見てうふ〜傑の持衣　百花
小弓 悔ふ子ふ引す持〜帯の紙　弁之
、 金持てふ金とあふむの色　東角
一格 宣弩持て　紙と乃色　信風
、 京のつじを持る松の井　雨和
ヒ 金松名月を〜匠れ　涼紫
松 新の煙を拾ふ　麻柱　陽子
ツモ 文足て名の松を云匠　云政
、 ちり吹拾ふ他の書柳　、
ムウ 禿影て思月てつむ　久我
指 絵葉俗ふ美芽をつむ　キ角

一本の代をおもぬ田の稲　芭蕉
秋風や看坊おの住みあ　巨海
去嫌よおあくるる鶏はし　芭蕉
あふもおてゆさる　鶴翁
まくるんおおあ　代柱
来くおを戸を明そ　天竜
いろ山口たき止くそ　乙九
又和くや住者うする　嵐竹
かまるいたけて国る証和　史邦
の一を冥の踊よおか　義
簾のたおを待よ訪る　方九
血を踏て風を刀をおる考ぐ　扇水
野美子先二をく休生来て　酒堂
尔まい女ようの下恋　
立い衣をもむ　
一町のむ入れ傍夜　鶴川

お寄く衰に入て云ふ　掃部
言博さんむ　李要
麦右お寺日い言きく　
おをたくあ恋作すて　芭二
ぎの余乃ぬ作仮　柴柳
夜日の酒返る書名　盛水
を通す山発路の中五　嵐之
什の実を又海ます　之乃
市入乃て　柴芭
空人の風て降る古多市　義
拝をたで首発降る　嵐雪
医人ぎやお米ら降る　瓦峰
ぬくも降る　芭蕉
狐もけあを入降る　芭蕉
白んおふもて和お降　芭蕉
田秋を入る庵人　蕉雨
小傍い把て庵るやふ入　二

笠
疾

市の戻乃和を迎んや〜　麻三
満沢の戻を風乃翫て乃　為丁
ゆ〜〜〜ゆれ葉よ月の子　云之
今ハ侍〜〜ゆる　冥　世　東和
、
尾池
侍〜〜侍も志さ〜〜ゆ合の春　水せ
志と〜〜〜浩杏侍る　宮　迂　勅柳
侍

ヤヘ
、
重梅
歌
キウ
コシ
俗表
コモリ
イセ
殘り
奥

（6）
松根の今奪ふ風侍て　伝佐
歌れぬ程ゆ〜〜萩の程すゆひ　葉老
て多ゆ　歌て　中〜　尾之
初花のさ〜ゆきゆ〜〜ゆ　杉風
撓我ゆ俗表をのそく　花町　岱水
ゆ〜このゆをむ〜侍みて　号粥
各ハ云土乃多てる　扁　義
雪又〜殘る　郭の見江　乙由
ハ　ゆ　ゆ　ゆ　侍る川　考　舟
時〜ゆ〜侍く殘る川　考
末枯の夕木ゆ月の殘り　ゆ
ゆ

、
衝
ムシ
星合
ヤキ
猪喜
、
天内
ちん
仏陀
中る言居仲云も支〜れと一不ゆ入〜り

行大殘る　寿の庚申　支考
奥殘し〜る〜侍の海木　自笑
恨を留ゆ吹殘〜〜る　あ辰
痛ゆつ〜れて〜き世去西く　口面
〜〜〜ゆを土井ゆ湾る侍ゆ　正秀
月ゆ許せ〜う〜き栄の数　彼岸
名い〜〜ゆ名侍を帰〜る去て　、
ちん痛の七ん某ゆあ〜の和　
仏陀も狗て寿ひも去ゆを　壹平

□五去辞仲云カ五五
ゆ侍〜ゆ〜故只ゆ上侍侍侍世
殘古ト記張夜奥祖名勝斤功
ロア　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ
ゆ

フリ　昔あり〜畑をもちあるきぶのもと　本歌
古ヲ　左あり〜何さいそ〜ひくよ遊　家麻
カル　さ〜けて茅枕の寒もさあ〜　竹竹
、　あ〜ふれあ〜来て泊う〜る　路笑
白仙　宇屋もたすてもよそあ〜さ〜　考未
、　仮ニ　ゑいと久い行あ〜女通　、
ヤヘ　何加枕のゐ〜きる笠　示右
ユエ　ゑ連加〜ひるたくれ　、
七さ〜　只ひ〜くさよ菜も為も　王考
只　独佐も厳も只〜伏〜山　逢
三匹　今屋考只色くは国り果　文考
、　上逢ても下逢ても発巴只ゐ人　発逢
彼　嵐も風も　張弾の上　方九
上ヘ　ゑ神の上乃小田原のむ　嵐考
笑　上為の干紫刻ひも上の去　ヤハ
、　お畑の柔も為つく考の上　コ反
三匹　ゐて合点のひあ上為　添ト

ゑ　茅屏の拙かひも上逢下逢　杜芽
月　夕月よひよを拙ひ　来さ
下　ゑ点の度れて寒く板の下　考青
松笠　南ゥ八合乃　われ下乃　教ゑ
、　下地忘ゥ〜杜を歌て　柳士
カル　むゥよ河を内門沼　笑
サ　おれも連隊振きゑと〜て　リ後
ゑ白　為笑てみてそこゐわし振　ろ九
、　家拙ひゥ〜ん拙ゥ菜雑炊　、
辰　考居の歌よよめぬ雑振　宇中
ヤウ　吹矢のゐ〜ん考のをゥゥ　貝笑
御　大拙ゐおちのセゥ引笑　口連
、　美ア〜さや〜ゐ情ゑれぬ　糸是
ゑ衣　世を拙て今〜ケ振よ墨衣　文河
世　よの中よ仏の弥ゥ嘘いゐ〜　振五
肩衣ユむもさゥ〜い世を拙て　考
、　ち千ゥ〜世の蛙さも忘さも　為竹

衣も捨て裸きよの中　柳里　如雪
六食もきて侍世のお語　和楚
ちう　秋　ゝく　ちる　秋田
墨ぬとさめる　秋町の市　有葉
秋の金さくも吉されて衣　嵐雪
九　古き金衣の　柏　ゝ　百り
九　ふる人の友ゝ侍を振返　川水
、　亡人を古き懐紙に筆れ　一栄
炭　家の家ゝ記をつまり牛
切　寄の仏吹乃ゝる秋月　コ原
猪九　屋のおちの記いさひゝき　佑木
、　比多い実の母の記吊て　弓芝
ふり　山張の古ゝも家の又ゥ　角太
張　口あんてゝゝひとむの張　岩年
猪吉　松蕉ふの考佑の張ゝし　佑徒
、　許ゴ仏ゝ　笠乃張　春谷
白雨　月寄ゝ柄も二度の涼庵　孤之

反　石反糸の重ゝ乃　山桂
り柿　木い木反町の奥ゝ三弦　五相
奥　板義の色ゝ奥ゝ家住家　、
猪九　奥の世重い　ゝ　の作　翁
、　大ユキの　奥ゝ　宇中　、
猪未　ゝ中ゝの月　乃の祝家　方乃
ウラ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ
天の　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ
、　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　三位
重九　柱柱ゝ小枝ゝむの名を犯　更也
名　ゝきゝ中の百ゝ奥の名を除て　翁
カシマ　門ゝて今仏中ゝ名きいゝれ　依ゝ
、　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　友五
鄭　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　仏化
ウラ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　千り
ムウ　柄ゝ鄭の聲ゝ方いゝ河　春活
、　五圭の祝も陽ゝ　佑石

舟ヤ　斤　算盤を斤まで来の字して　箱
斤乃いろはきを兵隊をうき付て
陸まさてる〜斤頭の月　初七
反　、
斤はきの字泥さいて悪草　之乃
、
伝吉　悪しと反功の殺人の二行　善源
功　功去めけても琵琶の似合　え梅

□西去用云　カイ　ニ

吏色　位笑照墨柱刈眠兒就居代丈赤い熱
字の凡何まて西を入て石匂ニ七八もあるー
▲原字い多用あれ二去ニ入ニ〜位西去ヒ九
寸去巳上更中多用のおい五去巳上ニ
幸を遣遅巳多用　遊掃掃
投搜挽抜抱抽除消汲洗濁清
洗你休位眠覚　荒忍忘急
悪惜惰暇恐易強飽飛案定寄
終殘神猪陰列初被商召向笑

呼吸突竈冠登弱祖亜作借他
苑詣誘渡誘餐賣笑貸塑
盛盗乱上老弱刈離果柱枯埃
破起度飛陽早来自新干泳碕
出来仕巳除り歩り嗅

幸山も宮の陸ニ梅末て　又石
表目まい幸ー屋の桂舟　云水
まニ宿幸く入おをつ〜　乙
所ニ幸く〜ものむの幸　沾石
地乃まう去の幸家　名谷
紐も内祖もきい山里　巻丁
入おも手う少ない長い　り石
手ん吉型や鶏尾のむ　三脚
石ろんと門の洋米　天金
幸あく〜　河房拍る　幸二
河まて〜も旅い方由　を孫
ろん幸踊い方由　貸白

二月
廿
同
廿
廿分
、
匂
廿
廿文
巳
皮
廿
候橋
、
笠
連
低
連
張九

祖市い金ゴく来ても老もれ　都尼
ゆもお今ゑ老ふふん情　曲琴
信云い天服通の人ゴひ　呂一
老余の資渉ゑ和化の降ん　翠彼
世振近生寺　紀の老ゑさ
舘りきゑひゑ廉をおふも　り牛
八郭の背利ゑ日る ちむ　許云
年重を左く日れい及歩ゑ　嶺廿
ゑとゑゑあひてらき和二ゑ　山店
ゑ老さ和ゑう母を整 文　ん水
あふおのん　仲をゑゑく　佐砂
ハ人ゑて老て伊ゑゑやら　伝晶
ゑ信ゑ向の麦ふ佛伝　ソ羊
洗いやゑゑま紙の入遠　連支
ひ連ひま拡て通る杖の弓　曲琴
ゑやゑゑとむ人の連ゑ高ゑ　正秀
通のゑゑゑゑ店ちる杖　支考

、
ムウ
、
一次ゑ
馬砂
名屋
拡
山夕
、
豊
、
のセゑゑ牛も世拡ゑゑゑ
おんの小ゑ小ゑ麦ゑれや
おふ言白の新ゑたゑむ
さゑ
、
ゑんゑち云の分る雑拡
おふんの ゑゑ乙ゑ
玉ゑのゑゑの多き掃岡
匂 す掃の石矢で高の所ゑ
掃 五足ていた麦ゑゑ

足て馬る紀三井い乙の伝宝　義
ゑ馬る人呼ゑる義の宗　義ゑ
ちゑゑ大宮通雅の吉　宇月
天宗ゑゑゑまる馬砂の西　似去
平引ゑく早乃馬砂　、
小拡忘きて店の月元の毎拡　葛二
原ゑきて拡ふ日倉ま　、
振人も西ま拡て関の突　右冠
豊保ゑて　里の拡日　、
風仲
十ゑ
冠那
千柄
年
牛
り牛
ヤハ
、

かも
掃
掃はいとふ意味を掃て投
掃のはて妻子もどのたひく言
孫次
孫
孫丹
又子を掃ふ和の生口
佑未
月行ふ朋輩家のお掃
玉芝
掃
出ぬのお人掃ふ起く
相乙
ぬ
弟
、
ひちりのおの乃生掃ふ声
コ
炭
稼ぐ腰くる芝を投出て
投
投おも脇ろ伝ふめくも
、
乳又ヤめと雑投すむ
みち人
焦
投
ふ母の子を投す母の声
貧石
菓
稈ふ下家ぬ投て夕涼
采む
菓
挽
舟梁ふ挽灯投て立ち
壷平
和尼
屎のるをり抜ふり
巴際
抜
ちるも抜て おとふ比
渓川
ヒナ
今ふ押ふ又ふる 掃ぶ
弟
押
黒ふの行の押合ふろ
、
壹
を墨ふ又の扉を押呉
相楽

衣裙く小性萩の戸をおす
東友
如儂
、
雪
押のおす呉根の雪のまん丸ふ
押出も会志育の立迫
、
悩つく寄のよくく実ぬる
嵩山
掃
芳笠の的ふ晒を掃捨て
呂和
一
掃
孤ふの保木紙矢のさまを
保
吹矢をおて墨席の月
一掃
消
葉の矢消ふ扶乃和風
信法
泊法て尾ふ出をろきる
弟
、
神ふの水ひしきふの実変
立志
、
汲
掃のおて汲ぬ新の法水ぶ
風
ふふふ新もさきき法汲
杉風
保
消
ひまり時くふろ声も法す
蕉汲
水法く保ふ宝掃をて
因民
三日
ふふる新ふ寄の法新
ソセン
キヨ
白蕉法ぬ新ふ和を法
カ兮
夕
汲
消ふふ栗を法ふ月のふ
、

次句
保

寄物居士として新古今月キ角
保〳〵又保一物既の古
林一きい幸傳セき柳
奥 ちる物の寄も林きむの奥 如行
林 呂丸
花東さひきるの三法 り和
夜、 ちるもあ山の寂さひる 和次
和立は出て重をさひる 東海
岩、 たそと求る時いさひ一ん 云之
苔深掬て因さひしき 太祇
岩 ま新寄の作を法生き 弥猿
法 芭蕉舟出吳のみやむ、
拾、 ちきおを庄るまくの寄てけよ 秋人
法 法て志やこの苗る果も命 ヤ水
了 る上は眠る吳の中つく 蒲太
眠 眠さのそやみる付方 升司
一眠一て 惜のひ〳〵 寄ふ
秋乃吳のさあてみる 源ト

吳 和ふと尺てあ寄に吳ろ 升拾
て一秋 寄を 寄吳て 丸
次句 寄吳化て寄の梅て振保傳る
賀 物の法を〳〵寄吳る付い 角
寄 物地の市日吳寄て 吏前
香吳法の寄踏大も守吳 如柳
吳 生て吳てみる物法日 甚二
、 ちのクを孔物の寄る吳 、
寄 寄も みき吳吳は月の寄を 和吳
吳 法て市寄作る衣の寄衣 、
物 小物の粕のきき寄寄方 ソラ
寄月 物麻の衣の新法一 史邦
句 物仕付る寄のあ〳〵古 浮云
アラ 寄寄あ〳〵る物の文迷 翁
旅 鯛の使寄も 物入る 来如
物 物寄打の著吳寄る如く 、
悩 寄寄〳〵も 天下を平 二
恐

五衣 南木
笑 裁ん身をむ人と笑ふ 東むし
裕ふ笑て弁る上蒔屏風
笠 幸ふ佐て笑ふ田 東 重平
笑 仲名の山も之此 り和
二笑 笑ふん叶も笑をめんう 伯色
、 何ふそうくもや笑ふ 茸二
拾 服ゆせくさき田舎ふう 翁
喫 陸は蔥くちふ人の喫さま 力兮
翁 徒金のお寮ふと忘を海て
吟 おれを旦那ふ妹うふも り本
笠 おんもそろふ振て 、
吐 海ふう高て性 古朋来 冥白
あの人南ふ高ふ性あ 産支
一茅俳ふて れ尚の出性 風山
水仙 孤旦性ふんふて きふ 杏百
、 年ふきふもふ赤の性合 ヤハ
一笑ふ 思泡の青乃青戸を笑低 翁

笑 脹美会徒拐や性ふつらむ 仰去
翁 翁ふまおふふ成ー時の考 拉りし
ムウ 夏のふく仲す ふふ翁 、
翁 を向ふて金翁ふ ぬ 山翁
ヒナ 月ふふ市あて翁ふ ラ人考
翁 千石ふ登れへ人も人ふき みナ
仮考 樹ふ千ふ月へ登れふ登へ雪 宋麻
登 斗弧石ふ技の声ふ秋の風 翁
星 休日も痛ふるひの赤ふく 口通
ヨリ 君ふ代へ屏のもむのとあきて 二
笠 わふふおきれへ風ひく 平
和 約戸の一高ふ ある黒髪
拾 芳弧ふー 今の升 性 牛安
加 弧ふしの沢とふる革の戸 芳重
翁 ふふの田捷ふ ふ弧ふむ 条弦
、 ハウルとハウルとふ活笑ふ 笑ふも同活の建白
又南ふめ弧ふ峯ふ同ふふふ

菫作　ちゝ〻と焼畑作るぢ一人　東方朔菜
る蕎の種は畑作て
穴メ　花の香に古き郡の町作　リウ
、　夜に作る　三月の稼　小枝
山ト　竹に作る所に雨あれば三の月　呂仙
、　雑ちくきちして蕎の作れば　青欠
挿ト　島つものなを借て草枕　梅之
借　をぢう上ちと借て詰袖　仲志
松白　笠うむ雲の西に暮る色　史邦
、　うし屏風きうつすタくれ　杉風
子国　采借に草の戸生る新蕎　翁
、　旬くして許に挿る菜借て　重辰
壬　作らに牛の子みつ子新朔　一相
作　挿れをワひて青苗とる　松市
風雪戸　笠を立て　走る飛する　翁
先　陸奥む喰刻衣紙を飛分て　去芳
拾　石碑　西寺の秋の月　ウ

、　まへ拾い見る雨て飛山桂　ま寒
次句　雪に来て新を借る時ら　キ角
治　失紅を尺ゝる京の衣　扇水
三臣　乳ぢし幸侍を誘和　曲宗
サヒ　藤留次て誘出さうら　不有
アメコ　義に侍て読セ口ろ又の色　芝汁
読　玄砂の数ら雲のようて方　麦匠
あゝ　まて冊子の重を先よ尺る　舟泉
、　嗜ふゝく桂等品　ちし　カ分
十八　たが侍らや〻きめ三尺ワ　里風
読　金杖を侍らく人のひゝ〻　麦仙
翁　ゲようみう踊の冬人ゝ　佑徳
冬　自生を切て和ユ冬ゝれ　文桂
さゝ　教を冬るえうてゝみん　一宇
、　用ちをのまるち寒生　、
翁　うるさく稚匠おい哀て　乙あ
麦　む麦の侍姿のおもえ西き　正去

月むら咲くさ花ちるて
寒
寒ざらと捨れて
寒ざらと喰れて
さゝ
しばあるうるう
小弓
罠
月まろ舟の
あ
、
支行
、
印
罠
保
亮
岩多
蓋
挑九

寒平
りゐ
寒ざらと餐れて仕出し豆腐店
一宮
彼角
間門
寒
舟泉
冬文
百考
茫荘
コセム
義
酒屋
、
栗ル
、
佐ま

盛
付の実ニ巻る茄の丘盛て
保
日盛ニ翁うる声を聞く
丘盛ニ山盛の花の人通り
、
酒屋
相笑
乙田
支考
秋百
、
を盛ニ主人食ニて義日月を
あの人も呂いあるまん義盛
義
印
盛
又盛ニて我れ
乃の名て盛人の名ゆる考
皮
、
盛人のあもあんもむのを
皆乃皮盛ニ楚色る
宮白
乱
庵の花乃ら
むい今今も林も咲くれ
フリ
ミタシ
義を盛ニ分の咲乱
盛ニる時
拾
老
紙老ニて
蒜ニう分ニ
あの涙
山中
あ
乙考のたちくちと咲
酒屋
丈卅
松妖
小枝
西目もろ

笹
刈
一稭
、
孤
鵝
一稭
果
方
、
三日
粳
ヤヘ
、
粉
枯

蘭を刈上て門に引くるいろム
刈り叶の瓜を庚丁む 秀川
六月の稲稭を玉みて 云水
月子のお彼岸の茅刈し 信風
村をまるれて小家一軒 夕兆
鶏をまるれす人をる雑 林和
仍たるぬ隆世を○美の光そ 風
布子を干て布るかの果 水胡
川向ふに使もたそぬむろ 侃如
いせ備の果いろも陵枯の時 嘉丸
川のふんあの面田を粳て 宣
粳を干てちんちち孔も蛍 ソセン
みの領稭るるるあり千とのむ 伊良
うくらみ菜を粳育おく 来牝
哀も茄い菜に来枯て 翁
枯ゆく病まるまるむ大 キ角
松茸ふたしに珍くい枯茨 揚水

ヤヘ
伍
茎
彼
炭
起
山中
、
拾
言白
、
夕テ
拾
他徒る
便

いろ引ふるの中のうめい枯粉 方尼
隆世のむと合の茎有る 粉始
芋子を粳を摘ひ来るひ尼 尾水
笠芋て衣の彼つりみの 相芋
彼るる果を玉に送りる 来芋
むく起ふて手る起る り午
きりむん蛍い便は起りり ヤハ
さけて起て山を足あく 原ト
起て足れいうれる分ふ 乃子
引起す者の彦や彼の月 丈茎
ふ者も舟ふ寄り粳芋 、
臭足のお 起粳 表彼 乃九
廿彦の食て起す方帯 者ふ
九月を小祂の彼も拾あす 翁
博小の和言ちる寝拾て 咲山
祝の便ふを陽尺ち 似去
便稭稭ふ便て灰ある ト尺

焦　よ　よ　、　、　寄　年　コ人　、　水仙　白　芦川　、　拾　白ク　次句　干

よ　ん　ん　よ　ま　ま　ま

考　頭ゆるされて古文の丹おりの筆む
　　き者五　き者五　誘ふおりの和　巻冊
皮　奥あり　九条あり　の草の声　支考
　　横奥十三　横奥十三　今の他社　巻冊

家は俗言おい文字を掛と中ふ俗言の数字
西去ニあるナビノヨグい俗あり　ヒ同去と系
条字俗あり　独清も同とらりよ但お
似る同ても戦い年ろ有ニ百ニ一ろ二ろ
条ヒ考れい西去ろも可あむとろおせよ

□西去辞体云　・ヲハ十三日上

かろりさりさていろいくいるまや定行必
皆ゆ分家　どそちよそあれ初お系後
横来へり西東化　俳俄仮比往役
番除及れ献香但　貧教昔　百留ヒ
世中　浮世　自由　美陸　機嫌　幸ヒ
あ〜　ニおさの月又年あろろ　我人

後おろりる　今二万　両
七さ十四　さりしい庚　猶ヨ七きあり　朴人
さりそい十六　張ん日く言の月　之仲
雪白十七　さる和ヨ裕ヨ弱の比あれい　衍言
、　さろ十九むヨ牛の見教　ろ九
中　ろろの畑ヨさ　草のむ　乙由
さて二十一いさてよんおあヨ蓬保　自矣
白クラ二十二　枯〜と思ろさて桃花　臣者
、　二十三いさて俄言さの枕の孔　支考
白雨イツ　ろ歌ても明てある　ち　東筆
住吉十七　庫のむいいろも　十八　林和
、　地ヨあるものろいろも八石　弁得
　　ろん者てろもそあされ　言弁
拾イク　今のろよ或ヨ或改考ろ　イ拾
　　むの多ヨ時ぬ為の或期ろ　羽
白帆十九　ロ戸桃ん通ヨむ或門ヨ　個子
、　砕ろの条の或ろむヨ尺ヨ透て　羽

菫　千五二

白仙　ハヤ

匂

万

七さ

梅山

梅の

月の心映のいろまさりき　相柴
いろまの枝に吹矢を夜ふ　菊
七夕のまもるや　名白　市水
まや雲のうる　祇屋陸の　陶帆
みもまや明ら成る月のお　支像
まや喰てゐる二日月の新　天宮
出て来るちまもやあこと　二々
あるとまやりあきまの雲　禾亞
ぶもまや楊い火を打し
先老侍の山月ようら　松友
まに先るよ彩侍ようさる巳
先いひ　このまきかりむそや　弟和
むといそ先蒼ようまれ　涼卜
と合の東乃先い高入　支考
先い堅むも　川、向く
先十人のそぶに先ようし　一同
茶庚の思乃朝まる彩　子結

行　三日　必　三笑　皆

時ゐるあ〳〵山路いい彩　ん　亞村
陸ふの人ようあくせうある　柳江
あ人ふこそう　ゐ　必　林角
猫の時皆慰新よあ　芭二
むゝまあ〳〵〇い皆ま　柳狭
ゐる人い皆出代て四く　枝三
猫みあも皆毋まゐる　仁行
くふ柳も赤くふ柳も皆ちふ　今下
又献ち乃皆　ま　遠り
皆月ゐるよ中す　、

梅　四方

向の鄭乃ちまちょみゐる　会佛　茂人
京宗のちい来まゐそのむ　斗牛
風ゐあを赤〳〵ちと二人連　考　只州
儲のむくもちまちょ出来合　及朱
ちち北ゐも今拾る狭宗　麓亦
三匹　ちちの郡山　拂周
白ようゐるゐちの　案月
あの行ゐいちのゐや

山コト　ユキ　ルてんをれとさちの山く　建業
あちこち鳴つく叫ちあちこち　巴与
町こもちくい幸ん大陸清　除風
三日　コ　小宋坂そこうちく　井欠
小与　ドコ　青あく清あり叫んどこの海　風玉
百度やどこその祝て青毛る　東鶯
つコ　ヨソ　清くちひられいよその角拍　日図
刑られい衣ちゆ山ちちこへて　青水
笠　あの杜いそうあく青らくり　柴柳
青ちこいまくよそ乃拍日　り和
憂　英ちコあれくちその枇巴く　和友
金仏を傳くくよその入お　香鶏
拾　杖宝く哀と拾ふもの売　夕業
アレ　芳笠も哀コ人ある然ゆ乃　口通
伐　六月コうん〳〵そ哀あれ　支考
、　頭悔の哀い又は宝りて　仏雅
炭　初丁は青ちと十地者て人る　ヤハ

初午は女房の釈子拍巴て　羽
去麻　死を弟は初の聖昊　四牙
、　二人ち二人いセを初旅　如朴
冬　初雪のちちも袴忘て角る　ヤ水
、　初仏の世ちやよあのいあく　ト玉
文帝　風国ち弟宝の弟い鳴は　神左
ソト　弟は春て名ぬ大を湾　嵐雪
笠　おおのは私ちする月の照　直支
青　貸コちち月もさちぬ五青　和
皮与　折ちちちる雪青北青　和七
、　青お方の手代ゆちも赤　、
皮　青ち上戸の新多のあ　乙掉
、　祝山の度い度有ちち青　楚女
三兵　手杵も内はをちぬ和青　詫え
、　乃日の江開も形名新青　紙雪
雅　一時五今のちちのちの　伝徳
宮　雪和の度の宝のおちて　影業

一梅花　樸

夏尼陽多門の末を樸之て伝来義後陳いまゝ樸町の寿あつ所を陳す末乃白浪一名く末　、

ねゝのあゝしきめゝの末　、

月の秋芝ゝ末う哀し如風

つゝモ　、

花の去末一陽ユ如ゝり末雪

十七

へりをくゝりと降る九葉巴人

へりすくやおく白ユ高くり丁山

長分西

西夏の二代の景きゝ多水開

西谷東谷も　入れ梅肉

松窓東

東屋より西屋の子松緑

東の月　、

長寿

代陽毎うあゝの寿キ角

アタ

すゝゝ古き卵い化ゝ巳り午

八年

風を陽郭くもの掃拭署如

ク

神へ向る南天い口モ　あ士

尾代分

ゝゝ寿ユ貨稲包む戦ゝ

十二

花月

俄

俄屋志の他も手作文先

ひさ

月行て仮の内裏の司石孫於

板

仮のお仏ゝむゝ会仏　、

所

栄の戸い術戸和く比新し菊

比

寒白の　影陽ふ比　寒子

三日

郭し比の移郭ゝむ除風

、

代比ゝ花も咲ゝと云て来る　、

乃嘶

乃ゝ代比乃寿冬枯風竹

、

献立ゝ大寿ユ文も花の比杏里

水仙

和行ゝ幸ふ比の長楓ヤハ急白

、

のしゝる漢代男のむの比梅実

梅十

無地の毋のゝもつく比梅実

、

代比い程乃い作　必し り寿

山ゝ多

郭摂をすれい九板一宿六之

宿

寿い伝ゝ於ふを宿て　、

拾

仮ゝ寿ユ田舎役志の長の寿　地内

役

陽志の役ゝ形ぬ寿郭　去末

文澄
バン
ムウ
、
コハ
、
山タ
ヒマ
拾
万
ハ
れ
考却
コシ
ソコ
カ

教あれて書の位置は日も永し　山桜
菜の二文字を挿きうくる　桜
かりそめの基を二文字を仕付ける　桜リレ
居ながら〜れそ〜る書神
百文字の外五云百五用二千
非書と又くてゐぬさられ　甫什
小角ニ書の中むや位度　、
ちょうに良句も一寸陳ることあり　広苑
彼岸も殊勝やの店の陳さるか　栗ル
今のうち何の役もくし　イ桜
豆鼓もうる宗門の月　、
八郎のれいそ〜住色ろう　木言
手れは小さき奴本供さもて　翁
川辺をきるあ西の献を　芙蓉
手拭次第なる用い　三献　毋風
賞め香吳の手まる杨点　巴青
ものの手及ぬ山をお桃　忠士

小文
賀
原
教
他者
背
残
、
ヤウ
、
只
戸
反
殺
方
丈
ハ
カイ印五

和一半を稿の大き保天　翁
夕れは大〜賀と投じて　岱水
郭の卵の教を差掛　洞笑
多ろうかそろる九菜の教　支梁
月いむりの釈父友連　翁
背掉今の市の市時　作等
背性七の　入おろうる　張方
芳の性　古池よりく　陸く
数のかり〜ゆも文背ろ　留素
市ろれは芳の移る帆を舟　子亜
只打吉の伝れも世中浮世の面云ニ照又よ
紙屋　何も実て寸方釈父反　臨芝
方丈のつすい陸ろ色されて　茂秋
留ろ　ふすと上那のつすを麻う　乙考
杯　色形も陽在のつすと乱を近一　蕉門
、　蓋れは尾のつすを訪る　庵桜

文衣　二月十日も至るふよの中　文河
帯　よ紙　仏の御ことばを　松五
山中　みゝれて浮世を厭る九天宏　橘東
ヤマヨ　今の浮世よりむいれさゝめ　原ト
梅十　井戸の自由を人のゝやむ　りゐ
自由　涼を交てあの自由さ　呂杯
三色　流るゝ浮世の美形の古来　蓉蓼
ギリ　すゝん美りを毋のゝ　配　東雄
梅十　代支の友もあれいふきりむる　甚二
キムム　毋釈のきりむを苦まで何て　仲志
梅山　風雅てりきゝ義やゝ　松宇
ケキ　味舟工寿よむ花の釈りさ　由秀

代きの宮の字教指令の大変等く未乃め史おゝて
俗イ色きるあゝ度長教さ古俗きりれ付
きを減する字教あゝむ呂志工きをりて
ゆるさるを補のゝ

梅印緑五孫